

第2回アジア・アラブ持続可能エネルギーフォーラムおよび 第2回アルジェリア・日本学術会議参加レポート

鈴木 義和

筑波大学数理物質系物質工学域

suzuki@ims.tsukuba.ac.jp

1. はじめに

アルジェリアといえば、皆さんは何を思い起こすだろうか。サハラ砂漠、フランスの旧植民地、アラブ・マグレブ連邦、アルベール・カミュの「異邦人」、豊富な天然資源 etc...。実際のところ、北アフリカ諸国のなかでは、エジプトやモロッコほど知名度が高いとはいえず、著者にとってもエキゾチックな国のひとつである。そんなアルジェリアに、「鈴木さん、ひとつ行ってみませんか？」と声をかけて頂いたのが2012年3月末のことだった。

ちょうどその頃、筑波大学のプロジェクトである「プレ戦略イニシアティブ：グリーンイノベーションのためのキーマテリアル高度デザイン拠点¹」に参加させて頂くことになっていた。その一環として拠点代表の中村潤児先生からお声がかかったわけである。「…特別、北アフリカと意識せずに、研究者として同等な立場で交流することがよいと考えています」、とのこと。二つ返事でお引き受けし、アルジェリア渡航への準備が始まった。

今回の渡航の主な目的は2つ。(1)5月15日、16日の2日間で開催される「第2回アジア・アラブ持続可能エネルギーフォーラム」と5月17日に開催される「第2回アルジェリア・日本学術会議」に参加すること、そして、(2)北アフリカ諸国の研究者の方々とのネットワークづくりを進めることである。

2. 渡航準備

筑波大学には、「北アフリカ研究センター (ARENA)²」、「北アフリカ・地中海事務所 (CANMRE)³」という文理融合型の研究センター・海外拠点があり、「第2回アルジェリア・日本学術会議」の主催者側となっている。今回の

渡航は、筑波大学から11名（現地事務所の方を含めるとそれ以上）が参加するという大所帯での移動である。ビザの手配からフライト、ホテルの手配まで、ARENA/CANMREの渡邊たまきさんがほとんどすべてを行って下さった⁴。筆者が渡航前に行った準備といえば、2つの会議へのアブストラクト（予稿）の送付と、実際の発表スライドの準備くらいであり、支援スタッフのありがたさを改めて実感した次第である。

さて、上にも少し書いたように、アルジェリア入国にはビザが必要である。学会・研究集会などの文化活動での入国は、「文化ビザ」を取得することになる⁵。数は少ないものの、アルジェリアに関するガイドブックも市販されており、「美しきアルジェリア」（大塚雅貴・ダイヤモンド社）、「アルジェリアを知るための62章」（私市正年・明石書店）の2冊は非常に役立った。

3. いざ、アルジェリア・オランへ

今回の目的地は、アルジェリア第二の都市である、オランである。アルジェリアは1962年までフランスの海外県が置かれていたこともあり (Algérie française)、パリのオルリー空港⁶からの直行便が利用可能である。このため、成田→パリ（シャルルドゴール）→パリ（オルリー）→オランの行程でアルジェリアに入国することとなった。

5月13日の日曜日。大学の同僚で、今回旅をともにする山本洋平先生と連れ立って、つくば市を出発する。パリ行きは21:55発の夜行フライトだが、万一の渋滞なども考慮して、15:50発と早めのバスで成田入りすることにした。

¹ <http://www.tsukuba-greeninovn.org/>

² <http://www.arena.tsukuba.ac.jp/>

³ <http://canmrenews.wordpress.com/>

⁴ ここ10年ほど、旅行手配はほぼ自分で行っていたので、こんなに楽をさせて頂いたのは久々である。

⁵ <http://www.algerianembassy-japan.jp/consular/files/VISA-Nihongo.pdf>

⁶ シャルルドゴール空港が成田とすれば、オルリーは羽田に相当する。オルリーからは、北アフリカ行きの便が多数飛んでいる。

実際には、特に渋滞もなく、スムーズに成田空港入りすることができたため、出発までゆったりと過ごすことができた。やはり海外出張では、気持ちに余裕があることが重要である。アルジェリアの通貨ディナールは、1ディナール≒1円であり、「空港で円からの両替も可能」との記述がガイドブックにはあったが、200ユーロほど、成田空港で両替しておいた（これが後で役立つことに）。



Fig. 1 夜行便でパリに出発

翌5月14日、朝4:30頃にパリ到着。あたりはまだ夜である⁷。オルリー空港行きのバスが動きだすのが朝6時。オルリーからのオラン行きのフライトは14:30であり、12時にオルリー入りできれば十分である。ずっと座りっぱなしだった体をほぐすためにも、朝食だけでもパリ市内で軽くとってからオルリー入りすることとした。



Fig. 2 カフェで朝ごはん。本場のパンはおいしい。

⁷ フランスはこの時すでに夏時間入りしており、実質は朝3:30である。

Time	Destination	Airline	Flight No.	Boarding	Gate
13:55	Cayenne	TX	570	Embarquement	A25
14:00	Fort de France	SS	924	Embarquement dos	
14:05	Istanbul Sabiha G.	PC	402	Embarquement	A24
14:30	Oran	AH	1061	Embarquement	A02
14:35	Bejaia	AH	1019	Embarquement	A05
14:40	Alger	ZI	257	A l'heure	Embarquement 14:00 A26
14:40	Santiago de Cuba	CU	445	A l'heure	Embarquement 14:00 A10
14:40	Tunis	TU	719	A l'heure	Embarquement 14:15 A23
14:55	Annaba	ZI	235	A l'heure	Embarquement 14:15 A01
14:55	Oujda	JAF	1304	15:50	A26
15:00	Oran	ZI	261	A l'heure	Embarquement 14:20 A03

Fig. 3 アルジェリア航空でいざオランへ

さて、いよいよ、オランに出発である。やや古さは感じるものの、特に機体も問題ない。フライト時間も2時間半と短く、「地中海をはさんで、マルセイユの少し先」、といった風情である。（乗り継ぎも含めて）日本からはかなり遠いアルジェリアであるが、ヨーロッパ人からすれば北アフリカはまさに「隣国」。途中ちょっとした問題があったものの⁸、うとうとしている間にオランに到着した。北アフリカでは夏時間は採用されていないため、時計を1時間戻す。日本との時差は8時間で、ちょうど夕方4時頃である。つくばセンターを出発してから32時間後のことであった。

オラン空港には筑波大学北アフリカ・地中海事務所の八幡さんと北アフリカーセンターの上山さんが出迎えにきて下さっていた。有り難い限りである。



Fig. 4 出迎えの人々で一杯のオラン空港到着ロビー

⁸ 私も山本先生もかなり背が高く、狭い座席に苦しんでいたが、隣席に超巨漢の人が…

日本からのほかの参加者の方々とも、オラン空港ではじめて合流することとなった。さて、なんとなく予想はしていたのだが、「やはり！」と思える出来事が起こる。空港内の銀行がすでに閉店しており、円はもちろんのこと、ユーロからも現地通貨に両替することができなかったのである。カウンター内には人がおり、一応は交渉はしてみたものの、「もう閉店だから」の一点張り。月曜日、現地時間でまだ夕方4時なのだが、ルールはルールである。今回はお出迎えがあったので大丈夫だったが、一人旅ならかなり厳しい洗礼である（空港内のどこかに ATM があるのかもしれないが…まだまだ信頼性は十分ではないらしい）。

迎への車に乗せて頂いて、今回滞在する空港近くの Eden Airport Hotel へと向かった。2時間ほどの休憩の後、「みんなで夕食を」と相成った。皆さん長旅だったものの、ほぼ全員が出席している。やはり研究者のパワーはあなどれない。

4. アジア・アラブ持続可能エネルギーフォーラム

5月15日。早速、公式日程スタートである。会場はオラン市中心部の東に位置する、オラン科学技術大学である。大学のエントランスすぐ隣の Auditorium が会場となっている。開会式には在アルジェリア日本大使らが出席することもあり、赤絨毯が敷かれていた。



Fig. 5 赤絨毯が敷かれた Auditorium

やはり VIP が多数出席するためか、開会式は約1時間遅れのスタートである。日本側参加者には「まだかな～、まだかな～」という雰囲気は漂っていたが、タイでの国際会議に慣れた筆者にはいつものこと。ちなみに、現在の在アルジェリア特命全権大使は川田 司さんで、筆者がお会いするのは3度目である（以前、ストラスブール総領事をされていた際に2度お会いした。）



Fig. 6 オーガナイザの Stambouli 先生とお嬢さん



Fig. 7 エネルギーフォーラムの開会式

いよいよ、会議スタート。本会議のキーパーソンである鯉沼秀臣先生⁹の基調講演である。サハラ砂漠に大規模な太陽光発電所を建設する計画を提唱されており（サハラソーラーブリーダー（SSB）計画¹⁰）、現在は、筑波大学の客員教授として（も）ご活躍である。

鯉沼先生のご講演に続き、太陽電池関連の発表が続く。エネルギーフォーラムの中心課題はやはり SSB 計画であり、サハラ砂漠の砂を太陽電池用シリコンに精製するといった発表も数多く行われた。15、16日のこの会議は、メイン会場のみで行われる形式であり、初日は遅れを取り戻すために休憩なしで15:00までぶっ続けというハードなものとなった。筆者の発表は約90分遅れで19:30頃の開始となったが、気合を入れなおして、TiO₂ ナノ材料を用いた太陽電池についての研究成果を紹介した。

⁹ セラミックス研究者には、コンビケムで有名な鯉沼先生

¹⁰ <http://www.ssb-foundation.com/j-index.html>

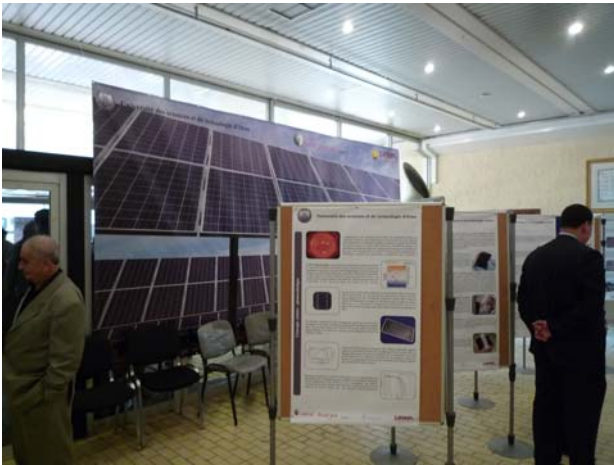


Fig. 8 会場内の掲示は主にフランス語



Fig. 9 ホテルでのレセプション。左のおじさんの動きが楽しかった。

初日の講演終了は 20:30。朝から晩までぶっ続けのハードな一日となったが、その分、SSB に賭けるアルジェリア研究者の熱い思いを十分に知ることができた。21:00 少し前にホテルに到着。日本人参加者のために、USTO (オラン科学技術大学) の方々が、レセプションを開いて下さった。陽気なリズムの中、長い一日が終わる。

5月16日。エネルギーフォーラム2日目。45分遅れのスタートとなったが、昨日よりは順調なスタートである。やはり太陽電池関係の発表が中心であるが、超電導送電などの発表も行われた。また、日本からは「SPring-8での和歌山カレー事件鑑定」で有名な東京理科大の中井泉先生も参加されていた。砂漠の砂の分析についてのご発表である。

セッションの合間を縫って、少しオランの街歩きをすることができたのだが、イスラム色はさほど強くなく、ヨーロッパの街並みに近い印象を受けた。オランは、フランス領となる前はスペイン領であったそうで、スペイン文化の



Fig. 10 オランの街並みと果物屋さん。色とりどりのフルーツが並ぶ。名産は「デーツ」(ナツメヤシ)

影響も色濃く受けているとのことである。観光地化されていない分、人々のリアルな暮らしを垣間見ることができた。アルジェリアの名産はデーツ(ナツメヤシ)であり、干し柿に似て美味である。糖度が高く、アルコール発酵させやすいため、最近では、バイオエタノールの原料としても検討されている。

さて、二日目午後はポスターセッションである。太陽電池関連の発表中心に活気あるポスター発表が行われた。ポスター終盤、せっかくの機会なので、オラン大学構内を30分ほど散歩してみることにした。やはり日本人が珍しいようで、積極的に学生さんが話しかけてくれるのが印象的である(日本だと、外国人の研究者が歩いていても自分から話しかける学生はまれではないだろうか)。いろいろ話を聞いてみると、アルジェリアでもやはり日本のアニメの人気の高いようで、アニメをきっかけに日本語の勉強を始めたそうである。少なくともオラン科学技術大学では、多くの学生が日本に強い関心を持っており、「できれば日本で研究してみたい」、と力強く語っていた。彼らはアラ



Fig. 11 活気に満ちた2日目午後のポスターセッション。

ピア語、フランス語、英語を使いこなす、いわばエリート学生であり、(もちろん個人差はあるとは思われるが)モチベーションも高く、親目的であることが伺えた。

5. アルジェリア・日本学術会議

5月17日。エネルギーフォーラムの熱気も冷めやらぬまま、アルジェリア・日本学術会議のスタートである。会場は15日、16日と同じくオラン科学技術大学であるが、オラン科学技術大学と筑波大学が中心となって開催する、より学術的なイベントである。午前中のPlenary講演に続き、「Food and Agriculture」、「Energy & Environment」、「Economy, Humanities and Social Sciences」と3つの分野に分かれてシンポジウムを行うこととなった。

筆者はEnergy & Environmentのセッションで座長と発表が当たっていたため他のセッションを見ることができなかったのだが、どのセッションも非常に活発に議論が行われていたと聞いている。Energy & EnvironmentのセッションにはSSBの関係者も多く、15、16日に引き続いて熱い議論が交わされた。あまりにも激しい議論となったため、一部打ち切りざるを得なかったほどである。英語オフィシャルのシンポジウムという建前であったものの、フランス語が当然のように飛び交い(さすがにアラビア語での議論はなかったが)、まさに国際会議という数時間であった。Energy & Environmentのセッションは、アルジェリア人のCo-chairが欠席であったため、結局、山本先生と私の日本人チームでマネジメントすることになり、なんとか予定時間どおりに終わることとなった。会場は最後まで満員であり、学生が真剣にメモを取っていたのが印象に残っている。日本人に欠けつつあるハングリー精神・上昇志向を垣間見た気がする。

会議終盤、Closing remarksを待つ間、オラン科学技術大学の学生さんたちと色々話をすることができた。筑波大学



Fig. 12 アルジェリア・日本学術会議



Fig. 13 アルジェリア・日本学会議の集合写真



Fig. 14 次回に向けて総括(中嶋先生と Stambouli 先生)

に興味を持つ学生も多く、彼らのうちの何人かが、近いうちに留学生として来日することもあり得そうである。

最終日には、USTOのご厚意で、アルジェリアの文化遺産(トレムセン遺跡)へのエクスカージョンも企画していただき、学術面・文化面ともにアルジェリアへの理解を深めることができる貴重な経験となった。

謝辞

今回の渡航に際し、北アフリカ研究センターの中嶋先生、磯田先生、八幡様、上山様、渡邊様、USTOのStambouli先生、アラブ経済フォーラムの北村様をはじめ、大変多くの方々にお世話になりました。記してお礼申し上げます。また、今回の渡航の機会を与えて頂いた中村潤児先生に感謝いたします。

補足・免責事項

帰国後の忙しさに追われ、本稿を書き下したのは帰国後2週間経ってからことです。多少誤りがあるかもしれません。参考程度にお考えください。Copyright (c) Yoshikazu Suzuki, 2012